The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「書くことと、考えること、行動すること」の特集にあたって
Author(s)	桂ノ口, 結衣
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2022, 4, p. 5-7
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86352
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集１　第３回臨床哲学フォーラム（シリーズ：ふるいにかけられる声を聴く）
テーマ「書くことと、考えること、行動すること」

第３回臨床哲学フォーラム
「書くことと、考えること、行動すること」の特集にあたって

桂ノ口　結衣

日時：2021 年 2 月 10 日（水）14:00-16:00
場所：オンライン（Zoom）
講師：栗田隆子さん

【プログラム】
14:00-14:10　注意事項・主旨説明、チャットを使うアイスブレイク
14:10-15:10　栗田さんのお話
15:10-15:20　休憩
15:20-15:30　ブレイクアウトルーム（グループ）での感想などの共有
15:30-16:00　全体共有と栗田さんからのレスポンス

臨床哲学研究室では、2021 年 2 月 10 日（水）に第３回臨床哲学フォーラム「書くことと、考えること、行動すること」を開催し、栗田隆子さんにご講演いただきました。

本イベントは当初、栗田さんのご著書『ぼそぼそ声のフェミニズム』（作品社）が刊行された 2019 年度末頃、臨床哲学博士後期課程および未来共生イノベータープログラムに在籍しておられた小泉朝未さんを中心に企画され、開催予定でした。当時の開催の枠組み・文脈は、大阪大学文学研究科の「社会人学生教育基盤推進」です。しばしば「倫理学」や「哲学」とは異なるバックグラウンドを持ち、また時間も十分には確保しづらい社会人院生さんの場合、大学院の履修カリキュラムだけでは学ぼうとする分野の基礎的部分をなかなか習得しづらいことから、カリキュラム外でも研究分野に関する事柄を学ぶ機会をもてるよう研究科が支援してくださっていました。小西先生がすでに『臨床哲学ニューズレター(3)』（2021:3）において

> 臨床哲学は長年、その場所が目指しているものや大切にしているものと、従来求められてきた執筆のあり方とのあいだに生じるコンフリクトに悩まざる得ない［ママ］状態にあります

と書いてくださっているように、それぞれが“現場”で大切にしようとすること、“現場”で／から考えようとすることと、「何を書くか」「どのように書くか」をどのように接続していったらよいのかは、臨床哲学研究室に身を置く学生たちにとって、何度も直面せざるをえない基礎的問題の 1 つでした。そこで、ご活動と共にずっと言葉を綴ることを続けてこられた臨床哲学研究室の先輩でもある栗田さんに、「書くことと、考えること、行動すること」の結びつきについてお話しいただく機会が計画されたのでした。ところがちょうどその頃 Covid-19 の流行が本格的に警戒され始め、大学の制度的にはまだオンライン化に十分に対応できず、残念ながら一旦中止となってしまいました。

会は、およそ１年を経て、オンラインで実現することになりました。「臨床哲学（研究）」における「書くこと」の問題は継続してありましたが、媒体は様々にある今日において、書くことと考えや行動、また書くこととフェミニストであることなどはどのように結びつきうるのか？　わたしたちが行っている・これから行える「書く」とは？　という問いは、研究の文脈をこえ、より多様な立場から関われるものだと思われました。そこで「第３回臨床哲学フォーラム」としてオープンに参加者を募集し、30 名の定員を超過するお申し込みをいただきました。ご参加くださった方、気にかけていてくださった方に、この場を借りてお礼を申し上げます。

哲学を学び、シモーヌ・ヴェイユを研究してこられた栗田さんは、貧困や労働などの社会問題を女性という立場から考え、こつこつと新聞や雑誌等で発言を続けてこられました。2021 年 8 月現在は『福音と世界』にて「I Say a Little Prayer　開かれる世界」を連載しておられます。一連の「臨床哲学フォーラム」には「ふるいにかけられる声を聞く」という副題がついていると認識していますが、栗田さんは、自分自身の中でふるいにかけられる（かけている）声に耳をすませることを通して、社会にあるのにないものとされる声をも聞いてこられた方ではないかと思っています。

今回のフォーラムで栗田さんは、ヴェイユの言う「不幸」に対しては（暴力にも転じかねないような）「言葉のなさ」、「呻き」があるのだと受け入れる（祈る）ところから始まり、「嘘をつかない」ようにしてなんとか生まれてくる言葉をまた受け入れ、考えていくという、「書くこと」「行動すること」の手前にあるご経験を丁寧に共有してくださいました。かつて１人でできる抵抗の手立てとして栗田さんが始められたという「書くこと」や、１人でパジャマに「BINBOW WOMAN」のヘルメット姿で各所に登壇されたという手立ての「行動すること」は、この社会において「行動すること」の暗黙の前提とされている「組織」のありようを問いなおす、重要な視座を含んだものです。

個人的な経験とシモーヌ・ヴェイユの哲学とカトリックの信仰とフェミニズムが独特の仕方で融合している栗田さんのお話は、この社会の、そしてこの社会を生きる私の根底に悶々とある、そのくせしばしばないもの扱いしてしまう問いや感情（呻き）に、するどく切り込むというより、そっと触れるよう促してくださるものだと私は感じます。この感覚は、お話を伺うときだけでなく、さまざまな文体・媒体の栗田さんの書き物を読む時にも通底し

ているように思います。今回ご参加いただけなかった皆様には、本特集も含め、栗田さんの多様な書き物に触れてみていただければと存じます。

また今回、文体や文量もおまかせしてのご感想を、有志の参加者の方にお寄せいただきました。栗田さんのお話を受けての「書くこと」は、きっとご自身のなかにある「呻き」の手触りを少しずつなんとか言葉に紡いでいくプロセスであったのではないかと推察されます。感想文を届けてくださったすえざわくりこさん、井上瞳さん、S. Tsubasa さん、小西真理子さんに、心よりの敬意を表します。みなさま、どうかぜひお読みください。

この特集が、呻きをなんとか言葉にしていく先にある「書くこと」を、そっと支えるものになるよう願っています。

（かつらのぐち・ゆい）